

---

# とある超能力者の恋愛模様【短編集】

ますたあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある超能力者の恋愛模様【短編集】

### 【Nコード】

N9129K

### 【作者名】

ますたあ

### 【あらすじ】

この作品はmixiの涼宮ハルヒのSSSコミュでお題SSとして、書きあげたものです。

内容は、タイトル通りです（笑）

作品がまた出来あがったら更新していきます。

## その1（前書き）

この作品は2008年12月30日に投稿したものです。

## その1

木枯らしが吹き、間もなく訪れる新年に向かって師匠のみならず弟子までも忙しく走り回っています。

そんな外とはうって代わって僕がいる喫茶店はまるで新年が訪れることを知らないと言わんばかりに時間が流れています。僕は注文したコーヒーが間もなくなくなるのを名残惜しく感じながらカップを回し待ちぼうけをしています。

そんな空間に少し世間の匂いと空気が入ってきてウェイトレスの入店のあいさつで誰かが来たことが分かりました。

僕は振り返ると、その人は待ち人を探しているのかキョロキョロをあたりを見回し、僕を見つけるなり息を調えないまま小走りで駆け寄って来ました。

「遅れて、すいません……！」

「いえいえ、間もなくコーヒーもなくなりそうでしたのでグッドタイミングですよ」

彼女は安心したのか微笑み、注文に取りに来たウェイトレスに「ミルクティー」と告げた。

「それで話して何ですか？」

「おやおや、怖い顔ですよ橘さん」

橘さんはハツと思わず手で口を隠し、顔を調べると

「ごめんなさい、最近までそういう仲だったから」

「いえいえ、そんなあなたに心奪われたんですから」

「もお、古泉くんったら……」

僕にはにかんでいることを悟られまいと彼女は俯き目だけは僕の顔を伺っていました。僕はそういう顔をするあなたの方が魅力的なんですね。

「今日は機関の顔をしなくて良いですよ？」

彼女を茶化すのはいくらでも出来ますからね。

「そうね、それで今日はどうしたの？」

「実は、今日はあなたに受け取っていたきたいものがありまして、新年を迎える前にも思いましたとお呼びしました」

そう言つて僕は黒い箱を彼女に手渡した。

「開けて見て下さい」

橘さんは黒い箱を恐る恐る開けました

。

「わあ〜！」

予想通りのリアクション……いえ、それ以上と言つべきのリアクションを彼女はとつてくれました。

僕はふと喫茶店に掛かつているカレンダーに目をやりました。

今日は彼女と付き合つて1ヶ月記念日。

「クリスマスは涼宮さん達と過ごしたんでせめての罪滅ぼしですよ、森さんに「何かしてあげないとかわいそうです」と半ば無理やり連れられて選んだものなんですがね。こんなに喜んでいただけると森さんに感謝しなければいけませんね。」

「キレイな色……これ古泉くんが選んでくれたの？」

「ええ、あなたのことを考えながら選びました」

橘さんはすっかり目を輝かせながらプレゼントを回して見つめていました。

「あたしは古泉くんにもないけど……」

「構いませんよ。僕はあなたの喜ぶ姿だけで充分です」

橘さんは照れくさいのかフフと可愛く笑つてました。

「ねえ、塗つて来ていいかな？」

「ええ、ぜひ。ですが……注文の品をいただいてからの方がよろしいとおもいますが」

ちょうど橘さんが注文したミルクティーが届きました。僕はゆっくりと飲むように進めながら彼女がテーブルに大切に置いたプレゼントのト口紅に目をやりました。

「先ほど、プレゼントがないとおっしゃいましたが……」

砂糖を入れ終えスプーンを回しながら彼女が目をこちらに向けました。

「一つありますよ」

「何？」

彼女はカップを口につけ今まさに飲もうとしています。

「その口紅をつけた唇で優しくキスをプレゼントしていただけますか？」

まさに予想通り彼女は飲んでいたミルクティー吹き出しむせていました。相変わらずかわいいリアクションです。

さて、次は何で彼女をからかうか考えながら笑顔でハンカチを橘さんに手渡しました。

〈終〉

## その1（後書き）

いかがでしたか？お題は『口紅、コーヒー、カレンダー』でした。超能力者のカップルは意外にすっかりはまってよかったです^^タイトルもなかったので、その1となってしまいました><古泉にいいようにいじられる橋はちょっときやわいいんじゃないでしょうか？

## その2(前書き)

こちらは、09年01月10日に書いたものです。



## その2

「はい……申し訳ありません……いえ、大丈夫ですので……それで、失礼致します」

ふっ。とりあえず、電話は終わりました。僕はベッドに倒れるように体を預けました。同時に携帯も僕の手から滑り落ちベッドに落ちていきました。

涼宮さんのお正月満喫ツアーでの手回しとお付き合いの疲れがここに来て出たみたいです。幸い今日はまだ冬休みということもあり、団活を休むぐらいであり影響はありませんが……。

「彼女には言わないでおきますか」

頭がぼーっとする中で僕は呟きました。あの方に言うつとすぐに飛んで来てアワアワしながらきつと心配されますからね。一応、お互い支障のない程度にというのが約束でお付き合いをしますから。それにしても、こうやって休むのも久しぶりですね。ひよっとして、これは神様からのプレゼントですかね？

そんなことを考えてしまわないと僕は今にも意識を持って行かれそうでした。

しかし、そんな抵抗も長くは続かず僕は眠りに付いてしまいました。。。

次に目を覚ましたのは呼び鈴の音でした。誰だろ？

ふと時計に目をやると夕方でした。思ったより寝ていたらしく外はすっかり暗くなっていました。

居留守も決め込こうと思ったのですが、呼び鈴は鳴り止まず、頭に響きます。重い体を持ち上げ頭痛を解放するため僕は玄関へ向かいます。

念のため、覗き穴から来訪者を確認しました。おやおや、やはり予想通りですね。

森さんや新川さんならわざわざ呼び鈴を押すことはしませんですし、涼宮さんならドアノブを回すでしょう。

従って、遠慮しながらも入りたい思いでいっぱいな方に僕は思い当たる節は一人しかいません。

僕はゆっくりとじらすようにカギを開け、チェーンを外しました。おっと、この顔じゃ心配させてしまいますね。

笑みを調えたあとゆっくりドアノブを回しました。

「これはこれは、よくここが分かりましたね」

僕の姿を見るなり少し安心したのか口元が緩みました。

「それぐらい調べれば分かります！それより大丈夫なんです！？」

「ご安心を。少し疲れが出ただけです。寝ていれば治ります」

おそらく、そうだとは思うのですが確信はありません。

しかし、彼女にはなるべく心配はかけたくないので、嘘も方便と  
いうことで。

「外はお寒かったですよ。よろしければ、温かい飲み物を飲んでいかれませんか？」

僕の申し出に彼女は一瞬困惑するも何か閃いたのか頷いてくれました。まあ、僕が帰れと言っても上がり込むと決め込んでいたのでしょう。わがままを言ってもらいたい気持ちもありますがここはイニシハチブをとらせていただきましょう。

「ここが古泉くんの部屋か」

あたりをキョロキョロと見回しながら橘さんが呟きました。

「そういえば、初めてでしたね？」

彼女の姿を見れたおかげか朝に比べ体が楽になっているのがお茶を用意出来たことで分かります。

「あつごめんね。しんどのに用意してもらって」

「構いませんよ。あなたに来ていただいただけで素晴らしい特効薬です」

朝比奈さんほどではありませんが僕なりに淹れたお茶を彼女にお

出しました。

「あつ美味しい」

「そうですか、あなたのために勉強した甲斐がありました」

少し驚きながらもまたお茶を飲み幸せそうな顔を作り、その打ち出の小槌のように振れば変わる表情に本当、笑顔が自然に引き出されます。

「ご飯は食べたの？」

「いえ、朝から寝ていたものでこれからです。病人ですから大したものを作れません」

僕は肩をすくめながら答えます。

「だと思って……」

すると、橘さんは鞆から徐に何か取り出しました。

「あたしがお粥を作っただけ」

なるほど、そのスーパーの袋はその用意でしたか。彼女はキッチンで料理を始めました。リズムよく刻まれる野菜に、おいしそうな匂い、いつもドジな彼女しか見てないのでこういう一面を見せようと惚れ直しますね。

そんな後ろ姿を見てると逆に熱が上がりそうでした。

「出来たよ」

もう少し料理をしている彼女を見ていたかったですね。まあ、またの機会を楽しみにしつつ僕は彼女の作ってくれたお粥をいただくことにしました。

「おや、これは……」

「そう、今日は7日だから」

彼女が作ってくれたお粥は七草粥。

「知ってる？七草って……」

彼女はそう言うなり得意気に説明しだします。知っていましたが、ここは彼女に説明を譲りましょう。

「そうだったんですか。それは勉強になります」

「えへへ」

僕に雑学を披露出来たのが嬉しかったのか彼女は満足そうでした。

「では、冷める前にいただきます」

「どうぞー！」

僕はお皿にお粥をとりれんげですくって食べました。

「うん、美味しい」

「ホント!？」

「ええ、とつても」

「良かった」

橘さんはホツと安堵の表情を浮かべ自分も食べ始めました。

「お似合いですよ」

「ふえ?にやにが」

口にお粥を含んでいたせいで正しく発音出来ず、慌てて飲み込み。

「何が?」

と改めて聞いてきます。

「エプロン姿ですよ。とつてもかわいらしいです」

「えっ?あっ……!」

彼女は慌ててエプロンを脱ごうとしますがどうやら頭で絡まって

ジタバタしています。やれやれ、でも彼女らしいですね。

僕は後ろに回り脱ぐのを手伝ってあげました。

「ふっー」

「慌て過ぎですよ」

「だって、急にそんなこと言う……」

彼女は言葉を失いました。正確には僕が彼女の言葉を失わせまし

た。

「こ……古泉くん……」

「すみません、ふと抱きしめみたくなりました……いけませんか?」

「そ、そんなことないよ!」

彼女は照れているのか目を合わせてくれません。仕方ありません  
ね。

「おや、熱ですか?顔が真っ赤ですよ?」

「ち、違う!」

「じゃあ、何ですか?」

「イジワル……」

彼女は下から目を細めて睨んでいます。僕は笑顔を彼女に向けました。

「やっと目が合いました」

「ま、まさかそのために?」

彼女は気が付いたのか泡をくつた表情を浮かべてます。

「はい、でも……全て本当にしたかったことです。病人は弱さから甘えてみたくなるものですから」

彼女を諦めたのか体を僕にもたれてかけて来ました。

「さて、良くなった七草粥のお礼にどこか出かけませんか?」

「うん!」

その時の笑顔はまるで無邪気な子どものもようでした。

それから僕らはデートプランの話に花を咲かせていたのでした。二人で計画を立てるのも悪くないですね。

〈終〉

## その2（後書き）

こちらのお題は七草粥でした。古泉には珍しく体調不良、まあ七草粥ですからね。古泉はやはり少しキザっぽくなっちゃいますね。でも、仕方ないですね。いっちゃんだから（笑）

知りたい背中（前書き）

こちらはマイミクさんのリクエストで書き、09年07月20日に投稿したものです。

## 知りたい背中

僕に超能力と呼ばれる力が宿って、早4年。人生の1/4が超能力者として生活を行っていることになりました。神人と戦うようなっ  
てから、彼女、涼宮ハルヒと出会いSOS団に入ってから普通の人  
では経験をさせていただきました。もはや、普通の日常では物足り  
ず、まるで平穩を望んではないのかと錯覚してしまいそうです。

そんな僕でさえこれから起こることをいつもの笑みで乗りきれ  
る自信はありませんでした。

「こんにちは」

僕はいつも以上に気をつけて笑顔を作り挨拶をしました。

「……」

返事として返って来たのが黒真珠よりも高価な視線でした。

「今日はどうされたんですか？」

いつもと変わらない制服。もしかして、クローゼットに制服ばかりが……。おっと、僕としたことが

冷静に考えればTFEIは洗濯をする必要がありませんよね。

僕は目の前の彼女が洗濯をする姿を想像してしまい、思わず自然な笑みを浮かべました。

「そろそろ、僕を呼び出した理由を教えてくださいませんか？」

そう言うとな彼女は突然ツツタと歩き出しました。

僕は少し大股で歩き彼女に追いつきました。磁石で引っ張られて  
いる様に彼女は歩いていくのに、僕はただ横で離れない様に歩いて  
行くしか出来ませんでした。

やはり、彼女のことは彼に任せるしかないですね……。こう思う  
とつくづく彼は役得ですね。

たまに彼は僕のことを羨ましがりますが、僕から言わせればお金



持ちが隣の家の通帳を見て羨ましがするようなものです。

所詮、僕は八方美人のいい人止まりなんですから。

おや、この道は……。しばらく、歩くと見慣れた景色が目飛び込んできました。もうすぐ、歩くと……。――

「あなたの住んでるマンションですよね？」

この質問に彼女は頷いたのか前髪が僅かに揺れました。良かった、僕に全く興味がない訳ではないんですね。

少し安心しながら僕は彼女に付いて行くことしか出来ず、ついに彼女のマンションに到着しました。

どうやら部屋に行くみたいですが、一体どうしたんだろう？いつも大人しい彼女ですが、今日はいつもより大人しい感じがします。彼ならもう少し分かったんでしょね。

「ここで待ってて」

部屋の前に来た時、初めて彼女が口を開きました。僕が理由を聞く前に彼女はスツと部屋に入って行きました。何も理由も聞かされず玄関に置いてきぼりにされ、もはや何が何だか分かりません。

「入って」

インターフォンから彼女の声が聞こえて来ました。僕はゆっくりドアを開け中に入りました。

しかし、中は真つ暗、彼女は一体どこにいるんでしょうか？

僕は彼女の名前を呼びながら壁を伝いながら進んで行きました。

ちようど、スイッチらしきものが手に当たり、僕はスイッチを入れてみましたが、電気どころか換気扇すら動き出しません。

ヒンヤリとしたこの暗い空間はどこかあの閉鎖空間に近いものを感じました。

しかし、残念ながら超能力が発揮される環境ではないみたいです。とうとう頼りにしていた壁すらなくなってしまうましたが、目が段々慣れ出したおかげでここが少し広い部屋であることを認識出来ました。

と、その時……。

パチ

パアーン！

パア、パアーン！！

軽い爆発音が部屋の電気がついた瞬間に響き渡り、思わず目をつむった僕の頭に何かがのっかかりました。

『古泉くん！お誕生日おめでとう！！！』

まだ状況が掴めていない僕を尻目に我らが団長様や団員の方々までが押し寄せて来ました。

「ごめんなさい！いつも副団長として準備をしてくれる古泉くんを少しでも驚かせようと思ってね！」

片目をつむって謝る団長は満足な笑みも浮かべていました。あなたがそこまで喜んでいただけるなら僕も少しオーバーに驚いておきましょう。

「ごめんなさい、涼宮さんが内緒って言うもんだから……あっビックリしてどこか傷ついたとかない？」

気づかってくれるところがあなたの良いところですね。彼とは違います、例え骨折していても大丈夫と言ってしまえばいいそうです。

もっとも、骨折したことを告げた方が本当にナース服であなたに看病していただける方が幸せだとはおもいますが。

「お前もたまには騙される気持ちも味わってみろ」

「ええ、まさかこんなに気持ちのよいものだとは思いませんでしたよ」

そう言うと彼はため息をつきましたが、少し満足そうでした。それから、一人ひとりからプレゼントを頂き、ローソクの火を消したりと、それは楽しい誕生日会でした。

しばらくして私たちは涼宮さんの号令の元、解散となった訳ですが……。

「……」

「見送りは良いですよ？」

「いい」

今日の彼女はやはり変です。さっきはあのサプライズだからと思いましたが、ちょっと様子が違いました。

「あなたに謝らなければいけない」

「ああ、あの呼び出しですか？確かに始めは驚きましたが、今は何にも思っていないです。むしろ喜ばしいことです」

「そう」

急に彼女は立ち止まりました。僕は振り返り彼女のそばへ歩み寄り……。

チュ…………。

頬に何か当たり少し音がしました。

「な、長門さん…………」

「お詫び」

そう言うと何もなかった様に元来た道に戻って行き、残された僕と頬に残った柔らかい感触が妙にマッチしていました。

そんな衝撃的な事実を理由なく起こされながらも何とか帰宅し、皆さんからいただいたプレゼントを開けてみました。

皆さん一生懸命考えてくれたのかどれも実用に富んだものばかりです。最後に開けたのは別れ際にとんでもないプレゼントをくれた彼女のものでした。

これは……DVD？

中身は某有名な水族館らしいですね。

……

なるほど……そういうことでしたか。僕はすぐに携帯である場所に連絡しました。

後日、私は待ち合わせをしました。恐らく……あつましました。

相変わらず、無機質な彼女ですが、今日は違います。なぜなら、彼女が私服だからです。

「お似合いですよ」

「そう」

「では、参りましょうか」

今度は僕が彼女を招待させていただきました。どこって？

そうですね……あなたと水族館に行きたくなったんです。

その時、ふと彼女が笑った気がしました。じゃあ、僕も今日ぐらい彼女に普通の姿で接してみましようか。

〜終わり〜

## 知りたい背中（後書き）

はい、古×長でした。このペアも意外にいいんですね 私の知り合いは激しくこれを推奨しておりますが（笑）

ひとまず、いっちゃん関連はここからです。また、書いた時は随時載せていこうと思います^^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9129k/>

---

とある超能力者の恋愛模様【短編集】

2010年10月11日04時51分発行